

日本語学のために

亀井孝論文集 1

吉川弘文館刊

著者略歴

出生 一九一二年六月、旧東京市芝区
学歴 一九三五年三月、東京大学文学部卒業
現在 東洋文庫研究員

亀井孝論文集 1
日本語学のために

昭和四十六年六月十日 第一刷発行
昭和六十一年十一月十日 第二刷発行

定価 五、〇〇〇円

著者 亀井孝
かめ い たかし

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

郵便番号 一一三
東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話〇三—八一三—九一五一(代)
振替口座東京〇一—二四四番

印刷 精興社・製本 誠製本

序

序というものは大家の書くものである、ことにこの論文集の序にはもっとふさわしい方が多々居られることとお断りしたのであるが、著者のたつての希望と、そもそもこの論文集の編纂を思いつき、ひそかに鈴木真喜男君と企らんだ陰謀の張本人であることからやむなく筆を執ることとなった。

著者の亀井孝君——あえて君呼ばわりすることを許して貰って——は実に古い友人である。もう五十年に近くなるであろう。小学生の頃、ふとした事から亀井高孝先生御一家と家族ぐるみのお付き合いをすることになり、同年配の関係で自然孝君とは親しくなった。同い齡とはいっても彼は明治末年の生まれであり、こっちは大正元年というわけで、すでに彼には元号の差と数ヶ月の長があった。況やその天賦の才は更に甚だしい隔りがあったので、私は常に兄事して来た。今でもその気持は変わらない。

著者が若くしてすでにいかに才氣溢れるばかりであったかは、私が中学生の一、二年の頃、当時私の通学していた学校の教官をしておられた東恩納先生の所へ彼の詩集をさしあげに参上したことで判る。考えてみると、孝君と机を並べて学んだことは大学でほんの数度しかないし、小学校も中学校も又高等学校も全く違ったコースを歩んだ私が大学へ入ったときは、彼はもう二年上の上級生であった。しかし折に触れよき先輩としていろいろと指導を受けた。

彼は文学的にも哲学的にも豊かな才能に恵まれているが、私にとってありがたかったのは、同じく言語を扱う道を扱んだため、話し合う機会も話題も絶えることがなかったことである。もっとも、昭和十二年暮から昭和二十年までは私が朝鮮に行っていたので、その間はお互いに疎遠になったが、終戦後は、様々なきっかけで親密の度は一層増した。そしてその間に受けた学恩は大きい。一往言語学で飯を食べさせて貰っている筆者は、無精でもあり不勉強でもあるけれども、言語学の趨勢について亀井君より教示を受けることが屢々である。亀井君はいつも言語学の最尖端を知り、又鋭くその動向を把んでいる。

亀井君はよく冗談に、自分が『国語学』（彼はこのコトバが嫌いらしいが）を扱んだのはお前のせいだなどということがある。彼は外国語に堪能であり、別してドイツ語は最も得意とする所である。彼の如き才能を以てしては、文学、それも西洋文学——特に恐らくドイツ文学——か、哲学の道に進んだとしても、必ず今やその有名を縦にしていたにちがいない。むしろ国語学を専攻したために、彼の名はジャーナリズムの喧伝する所とならなかったのかもしれない。しかし亀井君が国語学の道に入ったことは筆者のみならず、邦家のため大いに慶賀すべきことだと信じている。というのは、世の秀才がとかく欧米の絢爛たる文物に目が眩んで、足元の日本の事にはあまり眼を向けたがらなかった風潮の中にあつて、欧米の文化、思想にも造詣の深い人で、虫食った古書の中に埋もれて、その手がい実証的研究の内から高度の理論を打出すということはそうざらには見られないことだからである。

そうして事実、亀井君の、ここに次々に公にされるであろう数々の論文によって、いわゆる『国語学』の本質を明らかにし、その、実証主義の名の下にとかく視野の狭隘化に陥りがちの専門家達に対し、絶えず批判の矢を向けて日

本語研究の正道を示した。今日、彼が国語学界において鬱然たる勢を以て臨んでいるのは当然の所であるが、国語学もようやく旧殻より脱皮せんとする兆を示しているのにも、亀井君の腕みが利いているからだと思ふ。

彼の如き学殖と識見を以てしながら、世俗的には必ずしもしかるべき処遇を受けているとはいえない。それよりも彼の書いた論文の本旨が果してどの位理解されているのか、それを思うといささか同情を禁じ得ない。もとより、専門の論文の執筆者は誰でも、自分の書いている論文が果して誰かに読まれるのであろうか、又読まれたとしてどの位理解されるのであろうか、などと考へては書けるものではない。しかし亀井君の場合はいささか違っている。彼の論文はすべてその都度その都度の国語学界、言語学界のコンテキストの意識して書かれていたのであって、そのようなコンテキストの知識なくしては十全な理解が望めないものが多い。従つて本来ならば、各篇の成立した背景についての解説が望ましいが、残念ながら筆者にも一々の事情が判っていないし、又いろいろとさしさわりが無いともいえない。それに時間も不足して、そのような解説は一切割愛して、読者の推測に委ねる以外にない。

著者の該博なる知識はこの論文集の中に随処に見られるが、その故に彼は『国語学』の中に狭く閉じこもることを潔しとしない。しかもその鋭い頭脳は粗笨な推理を甚しく忌み嫌う。何事につけいささかもいやしくもしない、従つてすべてにずぼらな筆者などには怖い人である。その性格は文体によく現れている。殊に最近の論文は彼の真髓を見事に描き出している。

本巻載せるところは、著者の言語学の片鱗を示すものばかりである。その優れた批評眼はつとに定評のあるところ

であるけれども、本巻の最後を飾る論文は正しく圧巻というべきであろう。亀井君はシュハートに名を藉りてそこに自らを語っている。彼の言葉を借りていうならば、「かれはそのゆたかなちえの珠玉をひとり心おもむくままにあたりへばらまいたひととして、これを一口にいえば、非体系的なところこそ、その身上なのである。かれの活動をそのすみずみまでよく理解して包容しうるようなひとはきわめて得がたいままにかれはその生涯をつらぬ」(本書二)いて来た。彼こそ正しく「圈外の」、そして孤高の精神である。

この論文集の公刊に当って、なにかと御配慮を賜った山田忠雄氏、校正の労を取って頂いた阪田雪子・酒井憲二・倉持保男の諸氏、浄書と初校を手伝って下さった鈴木君のお弟子たちに、またこの出版を快く承諾して下さった吉川弘文館の社長、および編集部の方々に厚く感謝の意を表したい。なお、題簽は著者の懇望によって三根谷徹氏にお願いした。あわせて謝意をあらわしたい。

いま病床にあって静かにその病を養っている著者に快癒の一日も早からんことを祈りつつ

昭和四十六年四月二十五日

河 野 六 郎

目次

序	河野六郎
日本語学のために	一
現代国語学思潮の素描	元
日本語とその研究との背景	三
国語と民族性との問題	四
国語問題と国語学	六
日本語の現状と術語	七
文法体系とその歴史性	一〇
共時態の時間的構造	一五
「音韻」の概念は日本語に有用なりや	一六
意味のはなし	一七

「最善の音韻論的解釈は一つしかない」といふ作業仮説に對して	三三
「こくご」とはいかなることばなりや	三五
ソスュールへのいざない	三七
圏外の精神 フーゴ・シュハート	三九
付録 意味について(英文)	四七
著者あとがき	三一
再刷にあたりて	三三

日本語学のために

「学びて思はざれば罔く、思うて学ばざれば殆し。」

我国の所謂国語学の成立には、今日二つの異った学統の契機が数へられるであらう。まづ第一に、江戸時代に脈を引くところの、古来の国学の伝統があつて初めて現在の国語学は在り得るのである。国学者達の優れた研究成果が今日我々に与へてゐる恩恵は非常なものであり、我々はそれについて日比あまりにも忘れきつてゐはしまいかと思ふ。但し、それには、彼等の研究のみのりが既にある程度まで我々の教養の中に入りおほせて、我々の肉となつて了つてゐるといふ事も考へられる。しかし実はかゝる欣ばしき傾向よりも古き業績に対する無知の方が批判的にいへばはるかに顕著だと思はれる。我々は研究精神において、果して正しき理解へと努力してゐるかどうかをむしろまづ強く反省してみなくてはならないであらう。先達の功に對し、あらたな息吹を与へるには、今日の国語学史の態度ではいささか單なる骨董いぢりにすぎるものがある。

そこで、現代的意義を持たぬものは、研究価値なしとするのも一つの見方である。けれどもかゝる価値判断は徒に異つた視点に基いて過去の事実を毀損し、また彼の業績を不具に化するものとなりがちであつて、高位の立場に立脚する包容である場合は極めて稀であらう。否、果して従来の国語学史がこゝにまで思を致した事などがあつたであら

うか。されば、国語学史の記述が、新しく輸入せられた言語学の方法概念によって歪められ来たとする考へには一往十分の理由があると思ふ。しかしこれは何ら西欧の言語学の連坐すべき筋なき、本邦の国語学史一個の罪である事もまた明白である。歪められたのは国語学史への理解といふより、一層根本的には、言語学そのものに対する理解であるといへるのである。

こゝにおいて自ら明かな事は言語学が国語学の指導理念として取り入れられたればこそ、かゝる立場から国語学史も記述されるに至ったのであるといふ事である、實際はもとより甚だ皮相的な結果に終つてゐるであらうけれども。そして国語学史におけるかゝる欠陥は、とりもなほさず今日の所謂国語学の欠陥を露したものにすぎない。国語学はおのれの成立の基礎としての二つの契機を正しく認識しない事によって、身みづからディレンマに陥つて了つてゐるのである。つまり、国語学は一方自己の伝統に対する回顧においてまことに遺憾な点を蔵し、かつ言語学に対してはなまじこれを知る事によって反つて甚だ悪しき無理解をば暴露して了つたのである。竇弊が後者に基因する事は明らかであり、随つて前者が後者の結果である事も言を俟たぬ所である。

唯、老婆心までに附言しておきたいのは、かゝる場合排他的な考へ方はあくまで慎みたいといふ事である。私は、先進の言語学に対する絶えざる反省のみがこの場合必要だと信ずる。現代の言語学説に対する、無知無理解は、厳密な批判を下すとき、今日の国語学のあらゆる領域に隙なく窺はれるのであつて、我々はもはや問題を所謂言語学者達の批判に委ねたまゝでゐるわけには事実行かないのである。我々は現在の国語学成立における契機としての言語学的方法に対し、我々自身の立場からして学的反省を加へてみたいものである。そして言語学と常に歩調を共にして進ま

んとの努力を忘れてはなるまい。まさに、かゝる問題が我々のうちにあるといふ事をまづ識るべきであらう。私は大
学の学科別の如きが、それほど學問の研究分野を隔絶するものであるなどは固より思はない。国語学徒は言語学に
対していさゝかも頑なであつてはならない。たゞ、この国に未だ正しい国籍を有しない言語学説が、正体しれぬ鵠の
如くにたま／＼西欧の空より飛翔し來つて、ひよわい国語学をいたづらに怯えさせた事は事實あつたと思ふ。この点
については、私は誤解のないやうはつきり具体的に語つておく。則ち、ソシユール學派の、その祖師及び高弟バイイ
の學説の、忠実な移植者小林英夫氏にとって、国語学の現状はあまりにも齒痒かつたのであらう、氏は、イエルムス
レウの優れた思想をこの国に紹介する際、まづ先触れとして、いはば相手にならない喧嘩をば国語学に売つた。氏の
真意はわかるのであるが、とにかくその筆鋒の揮ひ方が結果において當時国語学を怖ぢ氣だたせ困惑せしめた事は事
實であつた。とかく退嬰的になりがちな国語学が、もし誤つて万一にも方法的反省などは断念して了ふが賢いと思つ
たりするなら、それは遺憾のきはみである。かくていま私がひそかに希ふ所は、たゞにひとへに、この短き一篇が所
謂、言語学と所謂国語学とのうるはしみのために、いさゝかの寄与をなりとも致し得たならといふにある。もとよりか
くあるためには私の国語学徒としての当然の義務としてまづ国語学自身に対しみづから要求し、かつは反省する所多
かるべきであらう。

国語学が現代に一定の位置を占め、學としての現代的価値を有するのは、要するに国語学もまた他の諸々の學問に
おけると同じく、現代を貫いて流れる共通な科學的精神に露されてゐるがためである。かゝる今日の国語学が如何な

る価値をば果して有してゐるかとはもとより後の歴史的批判に俟たねばならないし、またそれは或いは時のパースペクティヴの中に遠からず湮没してしまふ程のものかもしれない。たゞ、今日の国語学をかくあらしめたものは、後の歴史的判断とは何のゆかりもないのであり、彼と雖も畢竟するに時代の子である事は到底争ひ難い事実である。明治以後蕩々として浸潤し來った西洋の學問の影響は国語学を除外例とはしなかつたのである。意識的にせよ、無自覺的なるにせよ、この時代思潮に棹ささなければそれは將來の發展を約束されなかつたと言ひ得る。いはば、文明開化の一般の風潮に乗って国語学も西歐の言語学に範を求めたのである、もとよりかゝる領域への西歐文化の滲透は一般に他よりは遙かに遅れたではあらうが。とにかく明治以前の国語研究と以後の所謂国語学との間には、西歐の影響の有無によつて、太い一線を劃し得るのである。旧來の研究が一時全く陵夷して了つた後、再び国語研究が勃興し來つたときは、それはもはや全然新しい粉黛を以て粧うてゐたのである。そして、多かれ少かれ西洋の近代言語学による洗礼を受けてゐる点が今日の国語学に特殊な性格なのである。少くとも新しい成果を生むに至る機運が彼の異つた視角から導かれた事實は蔽ひがたいであらう。それには、旧來の研究理念によつては到底開拓し得ぬと思はれる研究領域の拡張といふ事實一つを摘示するだけで足りると思ふ。實際、その新しい眼光を以て從來溟濛の裡に閉ざされてゐたものをば陽光の下に竄し來つた功はこゝなどでは數へあげてゐる邊などないのである。しかし、單に新研究に対して外より触媒の役をなさしめるといふばかりでなく、逐次その理論乃至方法をば真に内容的に咀嚼し吸収してゆくのは決して容易なわざではないのである。一方では既に独自の伝統を背後に有し、かつ新しい方法理論を体得するにはそれを編み出した所の貴い体験を欠いてゐるからである。もとより、それら方法理論の發生的必然性をこの國で持ち得べき

道理はなかったのである。

当時においてはやはり我々のやうな若さを以て、初めて言語学を輸入した時代を生きて来られた老言語学者新村出博士の感慨深げな述懐を繙くとき、私は先覚の情熱がみぬちに熱く甦るのを感じる。学的回顧談として、博士の『言語学概論』（岩波日本文学講座、昭和八年）は極めて興味ある書だと思ふ。今日における、国語研究と言語学の立場との関係事情については、時枝誠記氏が最近既に述べられた。たゞ若い私は時枝氏よりやゝ気分において積極的であると思ふ。で時枝氏が、

……我国の言語学が、単に泰西の學術の移植といふ意味ばかりでなく、国語研究への何等かの寄与と云ふ実利的意味をも含むものと考へるならば、国語学徒は言語学者に対して次の様なことを希望するであらう。それは泰西に於ける學問の方法や理論的結論よりも、寧ろ対象と方法、対象と理論との関係、學派の起る根本的な理由、學派相互の関係、學問の動向を支配する背後的な理由等々に就いて我々に教へられる処がありたいと思ふことである。

〔「心的過程としての言語本質観」文学、昭和十二年六月、四頁〕

と述べられるとき、私は全くこれに同感であると共に、更に一方、「むしろ多きにすぎる理論や方法を以て対象に手を下し兼ねて」など居ないで、それをば自己の国語学徒としての確乎たる実証的地盤の内へ、批判的精神を持しつゝ、逆に包容してやったらよからうと思ふ。理論発達の歴史的事由についても、一往自分等は自分等なりに、国語学徒の教養の一つとして、進んでそれを知っておく方がよいであらう。まづ功利的意図をはなれてかくする方が、未だ概して理論的基礎の孱弱な我が国語学にとり、反って案外に急がば廻れの成功を齎さしめる事もあらうと信ぜられる。何

か他山の石となるといふ場合は勿論あり得るであらう。国語学において当初から内在的な立場のみが唯一の行き方であるとはもとより考へられない。それにとにかくな建設時代の域を脱してはゐまいし、草創期における苦しみだと未だ甚だ浅きにすぎるやうに感ぜられる。我らは新村博士達の努力を受け継がなければならない。かゝる場合博士達と我々との間に世代的な空白が存してゐることは国語学の発展にとって甚だ不幸であつたと思ふ。

さて、歴史的根拠は措くとしても、それ／＼發達し來つた多くの方法理論が、今こゝに新參者の前にずらりと並べられたからとて、徒に去就に迷つて当惑してゐるのは、またいさゝか氣の利かない話であらう。なかには、目新しさを喜ぶ陳列窓の内の商品のやうに、最新の時流に投じたばかりのものもあらうが、いづれにせよ、深刻な学的苦惱と劇しい冥搜との結果得られた方法に対しては、真劍にその本質を自己自身の地盤に立つて反覆玩味してみる事により、はじめてその真精神を把持し得るであらう。そして、かゝる真面目な反省こそ西欧の學說に対する追体験をなさしめ、随つて彼の方法を生かす所以ともならう。それは一往我の地盤において彼を殺す事により、以てまさに彼を正しく生かす事でなければならない。内在的といふ語もかゝる意味ではいへなければならない。かくてこそ従來の借物は国語学の肉とも血ともなるであらう。我が国語学の伝統深く融け込んでくるであらう。翻譯によつて右から左へ移すだけに往々終止し満足してゐるディレッタンティズムのわざとはいさゝかならずわけがちがふのである。勿論彼は羨しきばかりに自由な翼をもつてゐる。が、我々国語学徒は、西洋において發達した方法理論をみづからの巢に籠つて十全に理解する事により、むしろそれを超克するの氣概を示したいものと思ふ。今日の国語学にとっては、西欧の近代言語學が決して路傍の他人ではなく、親疎の程はともかくも、既におのれの學的祖先といひつべきものになつてゐる

るはずなる事を、なつてゐなくてはならないといふ事を、逸してはならないであらう。

しかし以上から明かな如く、彼の方法の眞実に国語学の中に渾然取り入れられた実例となると、実際には甚だ少いのである。單なる触媒の務めを以て事終れりとするのでなければ、多くは非常に皮相的な应用到にすぎないかにみえる。それにつき、方法の移入に関しては日が浅いと、一往遁げを張ることも出来る、畢竟するに學的體驗の乏しさといふ事は動かしがたい事實なのであるから。しかし方法の適用に至つては、單なる試験だと称するにしても、理由とはなるまいと思ふ。安易な応用などはもとより国語自体の歛び迎へる所ではなく、またさらに言語学の本意ではないに違ひない。まづ何より我々は国語そのものに対する諦視洞察を怠つてはならないはずなのである。所で新しい眼であるべきものが曇つてゐるのは何ゆゑであらうか。実は、たかゞ精巧な眼鏡を新調してみたにすぎず、新しい眼そのものを自ら見開いたのではないのである。随つて西洋に發達した実証的方法理論を知る事によつてそれが具体的に我が国語にもうまくあてはまらないかなどと試みてゐる限り、それは未だ多くは西洋言語学の視點に立つて（或いは彼の眼鏡を借りて）、たゞはるかに国語を瞻望してゐるにすぎないといふべきである。これは、まづ彼における個別的諸研究の豐贍な具体例に平行類似する現象を我國でも発見してみようとする努力となつて現れ、次いでかゝる方法の要請する所を單純に墨守するといふ形を呈する。

實際西洋人が日本語を研究する場合は斯様でもいい。しかしメイエの如く優れた学者になると、言語構造の相違に基く所の方法上の相違に対する反省をば向ふから促して來てゐるやうに思はれる（『史的言語学における比較の方法』

日本版（泉井久之助訳）に寄せた原著者の序参照）。真にのぞまじきは、彼の方法がもつ所の特殊性格を發生的に規定してゐる歴史的要因について知悉し、よつて反つてその方法をそのまゝの形においては忘却して了ふ事である。かくしてこそ何らとらはれる所のない日本語の觀察が遂げられるであらうし、またそれでこそ新に日本語の本質的な相貌が画かれ、おのづからなる方法的批判も生れて来るであらう。私は、国語学が西洋に發達した言語学を学ぶことによつて、彼の框の中に跼蹐する必要は毫もないと信ずる。国語学が西洋言語学における方法の適用例をば徒に豊富にするだけのものであるなら、その存在は甚だつまらないものである。反つて日本語の一角からして西洋言語学を方法的に拡充すべく努力してこそ價值があるのだと思ふ。單なる方法上の適用である限り、たとへ成功しても、それは學問ではなくして技術であり、探究的精神より技術的興味の方が先に立つて了つてゐるといふべきである。

かゝる点につき、自分はかつて、すぐれた個性的了解によつてこそよき類型化は導かれるであらうといふ事を述べた事があるが、時枝氏もまた前引の論文において国語研究の一般言語学的寄与をば強調されてゐる。この点、こまかい意見上の相違よりさきに、氣分的な同感を氏において見出した事が、同じ道に携はる後進として、まことに喜ばしかったといふ事を記しておきたい。

私は以上今日の国語学の姿を方法的理念の上から單に觀念的に性格づけたのであるけれども、しかし私の言は、少くとも私自身の觀ずる限り、一々それを事實によつてみづから裏づけ得るだけの根拠を有つてゐると信ずる。この場合、私は怠惰の故にではなく、煩瑣の故に、一に紙幅の膨脹を考慮して、それを行はないだけだといひたい。かつ、